附属病院で摂食嚥下訓練手技の指導を行う感覚矯正学科の池野雅裕講師

1997年に誕生した国家資格「言語聴覚士」は、「話す」「聞く」「食べる」ことの障がいに関わるスペシャリストである。

医療現場では、医師をはじめ理学療法士、作業療法士や心理職などと連携してチーム医療の一翼を担っており、高齢者の摂食嚥下機能障がいへの対応や、小児への言語訓練など、言語聴覚士への期待は年々高まっている。

川崎医療福祉大学 感覚矯正学科 言語聴覚専攻では言語聴覚士の養成を行っており、2019年４月には学部学科の改組により「言語聴覚療法学科」として開設予定である。感覚矯正学科で言語聴覚士の養成を担う塩見 将志教授に、新学科の設立や同資格の役割、大学での人材育成について聞いた。また、同学科の卒業生で川崎医科大学附属病院に言語聴覚士として勤務する中田 薫さんには、医療現場での役割について語ってもらった。

心豊かな生活をサポート、国家資格「言語聴覚士」

川崎医療福祉大学 言語聴覚療法学科

（2019年４月 開設予定）

川崎医療福祉大学
感覚矯正学科 言語聴覚専攻
塩見 将志 教授

しおみ・まさし　高知大学大学院医学系研究科博士課程修了。2013年熊本保健科学大学保健科学部リハビリテーション学科准教授、16年より教授。17年川崎医療福祉大学医療技術学部感覚矯正学科教授。言語聴覚士。

コミュニケーションを支えるエキスパート

―「言語聴覚士」とは、どのような職業なのでしょうか。

言語聴覚士とはリハビリテーションの専門職で、医療機関、保健・福祉機関、教育機関などで幅広く活動し、「話す」「聞く」「食べる」ことに障がいのある方たちへの訓練や指導を行います。

対象年齢は乳幼児から高齢者まで幅広く、対象とする障がいも多岐にわたります。例えば、脳の障がいにより、話す、書くなどが難しくなる失語症、唇や舌の筋肉を動かす神経の働きが悪くなる運動性構音障がい、言葉の一部が繰り返されたり、つまったりする吃音、声が出にくく大きな声が出せない音声障がい、生まれつきの難聴や加齢や病気などで聞こえが悪くなる聴覚障がい、食べ物を咀嚼したり、飲み込んだりするのが難しくなる摂食嚥下機能障がい、言語機能に遅れが認められる子どもの発達障がいなどがあります。

言語聴覚士は、支援を必要とする方が心豊かな生活を送ることができるようサポートする仕事です。

チーム医療の一翼を担う

―チーム医療の中でどのような役割をするのでしょうか。

医療に従事する多種多様な医療スタッフが、高い専門性のもと互いに連携・補完し合い、状況に的確に対応した医療を提供することがチーム医療です。

言語聴覚士は医師、歯科医師、看護師、理学療法士、作業療法士、医療ソーシャルワーカーなどの医療専門職、保健・福祉専門職と連携し、幅広い領域で活動するとともに、人が健康的に生活していく上で重要なコミュニケーションや食べる機能のサポートにおいて、中心的な役割を担います。

話す楽しさ、食べる喜びを支える言語聴覚士

言語機能や摂食嚥下機能のサポートに特化した言語聴覚士は、リハビリテーション専門職の中でも特に幅広い年齢層の患者さんに関わります。また、患者さんの人生を長期にわたってサポートすることもあり、大きな魅力と社会的意義がある職業だといえます。

実践力を養う教育環境

―言語聴覚療法学科の特長を教えてください。

学部学科の改組により、２０１９年度からは新設学科において言語聴覚士の養成を継続します。全国的にも４年制大学での養成が少ない中、隣接する川崎医科大学附属病院や川崎医科大学総合医療センターという恵まれた実習環境のもと、いままでに培った実績を活かして、専門性の高い知識、優れた臨床技術の修得、課題を解決する能力と豊かな人間性の育成、さらにこれらの分野での指導的立場になる人材の育成を継続していきます。

１年次には、言語聴覚に関するさまざまな領域の検査とデータに基づく障がいや症状の分析をします。また、正しい検査や分析を行うために不可欠な言語聴覚障がいの発生メカニズムを生理学・病理学・解剖学を通して学びます。２年次では、川崎医科大学総合医療センターで実習、３年次には、川崎医科大学附属病院での実習で、理論と技術の統合を図ります。さらに４年次では、８週間にわたる学外での実習で実践力を養います。

言語聴覚士国家試験の対策としては、川崎医科大学教員の協力も得て対策講義を行っています。

学内の実習室で知能検査の指導を行う感覚矯正学科の時田春樹准教授

少子高齢社会で高まるニーズ

―言語聴覚士に期待されるものとは何でしょうか。

高齢化が進む中、認知症、聴覚障がい、摂食嚥下機能障がいに対応することができる言語聴覚士のニーズは高まり続けています。２００５年からは介護保険での言語聴覚士による訪問リハビリテーションが始まりました。訪問リハビリテーションは、言語聴覚士が患者さんの自宅を訪問し、実際に生活している場面で言語聴覚療法を行うもので、言語聴覚士の新たな職域として広がりを見せています。病院では、２０１４年からリハビリテーション専門職の病棟配置が始まり、「介護を予防する」という観点からの役割も加えられ、活躍の場は広がっています。

また少子化の中でも、自閉症スペクトラム障がい、学習障がい、注意欠如・多動性障がいのある子どもの割合が増えていることから、小児領域においても言語聴覚士のニーズは高まっています。

このように、社会のさまざまな場所で言語聴覚士の必要性はますます高まっており、その存在と役割はとても大きくなっています。

附属病院の聴力検査室で幼児聴力検査の指導を行う感覚矯正学科の川上紀子講師

患者さんやご家族に笑顔を　信頼される言語聴覚士を目指して

感覚矯正学科 言語聴覚専攻
2012年度卒業
川崎医科大学附属病院 勤務
言語聴覚士 中田　薫さん

―言語聴覚士を目指した動機や目標について教えてください。

私は、ことばの遅れや他者とコミュニケーションをとることが苦手な子どもたちの役に立ちたいという思いで言語聴覚士を目指しました。

現在は、川崎医科大学附属病院のリハビリテーションセンターで、ことばと言語発達を支える認知機能面や文字学習などの発達促進を、ご家族のご協力を得ながら行っています。現場では学生時代の臨床実習での経験が活きています。隣接する川崎医科大学附属病院や川崎医科大学総合医療センターで、言語聴覚士として活躍されている先生方に直接指導していただけることは、本学の大きな魅力であると思います。

訓練を通して、お子さんやご家族の笑顔が少しでも増えたとき、言語聴覚士としての喜びを実感しています。今後もさまざまな職種の方々と連携を取り、幅広く患者さんをサポートしていきたいと思います。

リハビリテーションセンターでの小児の言語訓練

川崎医療福祉大学 言語聴覚療法学科　―2019年４月、新学科として開設―

川崎医療福祉大学 言語聴覚療法学科は「話す」「聞く」「食べる」ことの成り立ちを学習し、言語聴覚障がいや摂食嚥下機能障がいなどに対して支援を行う言語聴覚士を養成します。臨床経験豊富な実務家教員が、実際の医療現場での対応や判断、医療福祉人としての姿勢、検査や症状の分析を正しく行うための知識と技術を教授し、学生は実習を通して実践力を身に付けます。また、高度化・複雑化が進むチーム医療の一翼を担う医療福祉人として豊かな人間性を育みます。

言語聴覚士を養成する４年制大学は全国でも少なく、コミュニケーションを支える知識と技術を体系的かつ実践的に学んだ卒業生たちは、岡山県内をはじめ全国の医療機関などで幅広く活躍しています。2018年３月卒業生の国家試験合格率は96.8%（全国合格率79.3%）、就職率は100%を誇り、高い実績を築いています。

川崎医療福祉大学
リハビリテーション学部
2019年4月 新設

50th Anniversary Kawasaki Gakuen since1970

―― 新学部誕生。4つの専攻は、新しく学科として開設 ――

医療技術学部
リハビリテーション学科
理学療法専攻 / 作業療法専攻
感覚矯正学科
視能矯正専攻 / 言語聴覚専攻
臨床検査学科
診療放射線技術学科
臨床工学科
臨床栄養学科
健康体育学科
※

→

NEW リハビリテーション学部
理学療法学科
作業療法学科
言語聴覚療法学科
視能療法学科

「リハビリテーション学部」では、臨床現場で実際に活躍している療法士を教員として、最新の機器を使いながら専門知識・技術と豊かな人間性の備わった人材を育成します。

※医療技術学部は、新年度より５学科での構成となります。

川崎医療福祉大学
岡山県倉敷市松島 288　TEL.086-462-1111(代表)